

3 8 6 | 0 6 0 1

小 県 郡 長 和 町 大 門 3 3 9 3 | 3 1 9

宗 田 光 一 52 歳

(0268-60-0118)

マドリードの国際数学者会議見聞録

4 年 に 一 度 の 国 際 数 学 者 会 議 。 2 0 0 6 年
 は スペイン が 開 催 国 と な り 、 マドリード 郊 外
 の バラハス 空 港 近 く の コンベンション・セン
 ター で 盛 大 に 開 催 さ れ た 。 あ の フイールズ 賞
 も 会 議 の 開 催 を 飾 る イベント と し て 、 毎 回 授
 賞 式 が 行 わ れ て い る 。 数 学 史 の 証 人 の 一 人 と
 し て 、 数 学 好 き の 私 も 9 日 間 と い う フル タ イ
 ム の スケジュール で 参 加 す る こ と に 。 今 回 は
 学 習 院 大 学 の 飯 高 研 究 室 の 方 々 に 同 行 し 参 加
 さ せ て も ら う こ と に な っ た 。

8月22日の開会式当日、朝の早い時間に会場のセンターに出向いた。セキュリティチェックが厳しく、入り口には長蛇の列。そのようすをテレビ局が撮影している。夜に放映されたニュースで、不安そうに順番待ちをしている各国の数学者たちの姿が写しだされていた。

警察官らしき男たちの腰には銃。その太いベルトには、実弾が並んでいる。マドリードではこのところ、テロの爆弾事件があいついだので無理もない。手持ちカバンの中身も全て見せなければならず、参加認証の首にぶら下げたネームのない人は入り口から中に入る事ができないという、実にものものしい警備が連日続いていた。

飯高教授は会議に参加する日本人のお世話に一役かっているらしかった。先生は代数幾何という分野の専門家で、多くのドクターを

育てた大変な秀才である。その教室の研究員で博士号を取得したばかりの研究女史Iさんも、ポスター・コミュニケーションという企画の研究発表に参加しているとのことだった。視聴覚機器やプロジェクターを使っての発表ではなく、パネルに貼られた素朴なポスター状態の研究論文を、来場者に説明するという研究発表のことだ。

ドクターを取得できたものの、自分の専門外は全く何がなんだか分からないというのはいくらも当たり前なのだそう。専門家としてはそれでいいのかもしれないが、なにか不可解である。専門に特化してバランスを欠いた研究というものの有り様が、私には奇妙なことのようには感じられた。

数学の全体が見えてはじめて専門の意味があるのではないのか、と素人ながら感じてしまふ。専門外のこととは全く分からなくてもいい。その感覚がどうも釈然としないのだ。新しい研究にはさまざまな分野の融合や刺激、

新しい組み合わせの道具などがかかせないのではないのか、と思う。I女史いわく、多岐の分野を学んでいては選択が広がりすぎ、専門特化できずに博士号という称号を取ることができないのだそうである。

こうして誕生した数学のドクターたちは、ほんとうに数学に貢献する人材となるのだろうか。近年ドクターは量産されているらしい。そのため就職活動がとりわけ大変なのだそうで、有給での研究職にありつくのが過酷な競争なのだという。

数学が好きでその道の研究を続ける。過去の大数学者はみなそうした夢の延長にすばらしい発見をし、数学に貢献してきたように思う。このとき知り合った若いドクターたちは、マドリードの会場では勉強の延長という意識からなのか、だれもが才気なく退屈そうだった。

その一方で、研究室の先生は絶対的な存在のようだ。ご機嫌を損ねないように気遣うさ

まは、お気の毒としかいいようがない。数学はひらめきを楽しむもの。幸い私には特定の先生がいないので、そうした軽妙さを持ち合わせているのだと思う。

コンサートホールのような大きな会場での講演はもちろん、小規模の教室でも時間の隙間なくスケジュールがこなされていた。トータルで1000を越える研究発表が行われたことになり、数学の多様さ、裾野の広さにはほんとうに驚きを禁じ得ない。

そんな中、日本人で高齢の伊藤清先生に對して、確率解析の業績で第一回目のガウス賞が授与された。応用部門に貢献した数学者のために始めて創設されたこの賞に、まず日本を代表する数学者が選ばれたことは意義深いものがあるし、研究者といわれる人の喜び、榮譽とは何か、それを深く感じさせてもらうことができた。

飯高研究室の参加者は、予定していたポス

ター企画の発表が終わると、会期の途中で帰国の途についた。観光にはそれなりに時間をとっていたようで、だれもが自分の専門分野以外のことにあまり興味がないようすだった。世界の研究者はいま何を考え、数学とどのよう
に格闘しているのか。そのことにはあまり興味がないらしい。他を知るそういう貪欲さ、好奇心が無くていいのだろうか。せっかくの機会なのに、実にもったいないことだ。

会期も後半にさしかかったある日、コーヒ
ーを飲みながら若い日本人に声をかけてみた。
優秀な彼は、私が聞きもしないのに自分の専門分野について口早に語ってくれた。ドク
ターを取得したのは東京大学の大学院であるけれど、学部の出身は都立大学だという。なぜ、
そういう経歴を述べ合い、お互いを確認し合
うのか。よくある光景なのだが、そのことが
私にはどうも理解できない。彼は細い黒縁の
めがねの奥で、神経質そうな目を光らせ、な

ぜか学歴の遍歴を気にして私に説明しようとする。私が何者でどこの大学に所属するかが気になるらしく、彼は私にたずねる。私は数学が好きなただのおじさんですと応えると、そのことが不満だったらしい。ほどなく寂しそうに立ち去ってしまった。

彼はとても正直な青年だと思う。ただ私は彼の経歴のことを聞きたかったのではなく、数学の話題で楽しい時間をすごし、機知にとんだ会話でくつろぎたいと思っただけなのだ。ドクターを取ったばかりの彼には、研究対象への興味よりも、自分がどのように評価されているかが途方もなく重要なことなのだろう。話し相手のレベルを常に確認しないと、会話そのものが成り立たないということらしい。未熟な心理状態のようにも感じたが、なんとなく多くの研究者に共通した感覚のようにも思われてきた。

いまガロアが生きていたら、こういうドクターに黒板消しを投げつけたかもしれない。

私が思うに、多くの研究者がもう少し大らかな感覚で多くの人と数学の話題を楽しみ、自分の研究を开花させることに目覚めていくようにしないと、次の時代の数学世界に貢献できるとは思えない、そんな優れた研究というのは生まれ出てこないのではないかと心配になってくる。専門分化もいはいけれど、他の人のやっている仕事などにももう少し関心を払ってみることは、数学に限らず、いつの時代でも大切な学びなのではないだろうか。そう思ったりもした。

講演を横断的に聴きまわった感想として、最近のアメリカ数学者の際立った特徴は、やはりコンピュータへの異常なまでの関心の高さだった。離散数学というのがその分野の研究の中心だが、それとは別にアルゴリズムそのものの研究も新しい分野として、近年数学と考えられるようになってきているらしい。

有名な四色問題は、コンピュータ・プログ

ラムの計算手順が正しいかどうかの判定によって証明そのものが正しいとされた。4年後はインドでこの会議が開かれる。その頃にはさらに数学とコンピュータの新しい関係が生まれているかもしれない。今回もインドの青年たちの学ぶ意欲と情熱には頭の下がる思いがした。それにもまして、民族衣装に身をつつんだインドの中年女性たちが、熱心に聴講していたのも印象に残っている。

マドリッドでの9日間は刺激的で、私にはとても短く感じられた。一方ホテルで知り合ったN大学のY教授は、公費による観光旅行に余念がなかったようだ。この国際会議に参加し、確かにここに来たという証拠の写真を、私自身が何枚か取らされるはめになったことには複雑な思いが残った。彼の旅費のすべては、おそらくなんらかの税金のたぐいであり、研究費として支給されたお金が、めぐりめぐってこのように使われている現実。大学の研究職というのはいったい何なのだろうか。否

が応でもそんなことを考えさせられた。数学のようなお金がかからないとされている研究でさえ、こうしたことに出会うというのは、辛く悲しい現実である。

会場入り口の外では、石の大きなモニユメントを制作している日本人の彫刻家がいた。海外ですでにたくさん作品を制作しているようで、数学をテーマにメビウスの帯のような石の作品を、会期中に完成させるべく制作披露していた。スペインのマスコミは彼の作品を大きく取り上げて放映していたのがおもしろいと思った。数学の目に見えない研究成果よりも、石のオブジェの方が分かりやすく、テレビ写りとしてはいいようだ。

全ての日程を終えた最終日に、ホテルから空港へ送迎してくれたマドリッド在住の日本人が、車中でスペインの闘牛の話をしてくれた。なぜ多数のスペイン人は、闘牛という残酷な牛の殺し方を歓迎するのか。彼女が説明

するには、美しい英雄の死を身近にくりかえし感じることで、人は短いその人生をよりよく生きることができると。そのために、力と美の象徴である雄牛の死を見るのだ、というのである。いまの日本という平和な国に住む私達には、壮絶な死はおよそ遠い国のできごとであり、まさに身近な存在ではない。より良くいきるためには、身近に美しい死というものを感じる必要があるのだという。一晩にして私の闘牛観は変わったように思う。

この会議で私は、ガウス賞に輝いた伊藤清の祖国日本に生まれたことを誇りに思うようになった。そして人生の終焉をどのように迎えることがいいのか。予期せずして、そんなことを真剣に考える契機となった。乾燥した夏のマドリッドで体感したことを通して、さらに数学の本当の楽しみと思想のようなものを、これからも学び、考え続ける人生を歩みたいものと思った。

(了)